

終末期ケアにおける作業療法 Position Statement on Occupational Therapy in End of Life Care CM2016

この文書の目的は、終末期ケアにおける作業療法の役割に関する世界作業療法士連盟(WFOT)のポジションを説明することである。作業療法士が関わるさまざまな健康状態、障害、疾病の終末期にある人々すべてが、意味のある作業に結びつくことを通して幸福(well-being)と生活の質についての権利をもっている。死は、人生において避けることのできない自然の結末であり、作業療法士は死にゆく人々やその家族のための望む作業への参加をサポートするという独自の役割をもつ。

とるべきポジションについての声明

終末期ケアにおける作業療法サービスの目標は、作業との結び付きを通して最高の生活の質と幸福に達することである(Pozzi, 2010)。人生の終わりに近づく人は、徐々に心身機能低下や身体構造の障害を経験するかもしれないが、生活参加における権利を失うものではない。人生最期のときでさえ、可能な限り十分に、作業役割や価値ある日常生活活動への参加を続けるという望みをもつかもしれない。作業療法士は、望まれた作業の遂行をサポートするために、人と環境と作業のトランザクショナルな関係を理解する。その作業は、死にゆく人とその人が愛する人々の生活の質を高めるものである(Pickens, O'Reilly, & Sharp, 2010)。クライアントの余命の長さに関わらず、作業療法士は作業との結び付きを通して、機能的で、安楽で、安全で、自律的で、尊厳を保ち、社会参加ができるように独自のサービスを提供する。

作業療法にとってのこの問題の重要性についての声明

作業療法は、死にゆく人とその愛する人々のケアに重要な貢献をする。それは、潜在的なバリアを最小化し、強みを最大化するために、課題を分析したり、活動を調整したり、環境を適応させたりするスキルを使うという貢献である。自然に起こったり予測される機能低下のために、死に近づく人は日常生活の価値のある領域への参加を促進するための最適な方法を決めるために、作業遂行の継続的な評価を行うことがよい(Pozzi, 2010)。作業療法士は、人生の終末期に価値のある作業に結びつくことを促進するような機能的遂行を最大化するために、適応、代償、調整、予防、教育のための技能を使い、身体的、情緒的、心理的機能の低下に着目する。作業療法サービスは、クライアントや家族やその文化的文脈にとって意味のある実践となるように設定される。

社会にとってのこのポジションの重要性についての声明

緩和ケアの必要性は、寿命の延伸と非感染性疾患の増加により高まっている。終末期ケアにおける地球上での格差は、多くの国でのケアの限られた財源と同様に政府のサポートという点で、困難な状態にある(Glass 他, 2010)。社会的、文化的、宗教的影響は、地球全体でホスピスや緩和ケアの利用に影響を与えている。継続的な地球規模での政治方針と先進国や開発途上国における優れた緩和ケアのための教育が必要とされる。

作業療法は、ホスピスや緩和ケアでは全体としてあまり利用されていない。しかし、臨床実践、教育的主張、世界的研究が、終末期のクライアントへの作業療法が有益であることを示している(Keasing & Rosenwax, 2011)。臨床での優れた実践により、終末期ケアにおける作業療法の役割の意識の向上とエビデンスを示すことが緊急的に必要である。作業療法士は、終末期ケアチームの中で、社会の作業ニーズについて、その影響力を広げて成長の可能性を示している。

ポジションの論拠

終末期のクライアントにとって作業療法サービスは適切ではないという誤解がある(Benthall & Halmes, 2011)。意識と義務感が高まるに従い、世界の作業療法士は、終末期ケアチームの中核となる価値観の一つとして作業参加を含めようと主張するだろう。WFOT は、人生の終末期にある人々の経験や生活の質に、作業療法が直接影響を与えること、そして終末期ケアにおける作業療法サービスを推進するために主張していく必要があると認識している。

チャレンジとストラテジー

WFOT は他の団体と共に、実践、教育、研究における作業療法独自の知識基盤を発展させ、推進し続ける。そうすることで、重病に直面していたり、終末期のケアを受けるクライアントのための介入計画に作業療法が含まれることになるだろう。クライアント中心の実践とクライアントを中心とする考えで進む作業療

<https://www.wfot.org/resources/occupational-therapy-in-end-of-life-care>

(2020年5月2日 吉川ひろみ・訳)

法の基本アプローチは、終末期ケアにおける私たちの役割を主張する理想的な地位に作業療法を押し上げる。

結論

作業療法士は、人生の最期の時期においても個人の成長と発達が起こり得ること、作業への参加が特に人生最期に近づく人たちにとっても変化を起こし得ることを認識している。作業の専門家として作業療法士は、終末期ケアチームに対して重要な影響を与える。そして、人が機能低下や終末期の疾患に直面している状況において、どのように生活し続けたいと望んでいるかを理解するための価値観を持ち込む。終末期ケアチームにおける作業療法の現在の在り様は楽観的であるが、社会のニーズを充足するために引き続き主張し、サポートする必要がある。

References

- Benthall, D. & Holmes, T. (2011). End-of-life care: Facilitating meaningful occupations. *OT Practice*, 16 (9), 7-10.
- Glass, A.P., Chen, L., Hwang, E., Ono, Y., & Nahapetyan, L. (2010). A cross-cultural Comparison of hospice development in Japan, South Korea, and Taiwan. *Journal of Cross Cultural Gerontology*, 25, 1-19.
- Keesing, S. & Rosenwax, L. (2011). Is occupation missing from occupational therapy in palliative care? *Australian Occupational Therapy Journal*, 58, 329-336.
- Pickens, N. D., O'Reilly, K. R., & Sharp, K. C. (2010). Holding on to normalcy and overshadowed needs: Family caregiving at the end of life. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 77, 234-240.
- Pizzi, M. (2010). Promoting wellness in end-of-life care. In M. Scaffa, M. Reitz, & M. Pizzi (Eds.), *Occupational therapy in the promotion of health and wellness* (pp. 493–511). Philadelphia: F. A. Davis.